

わたしたちが眠りにつくまで、まだまだ道のりは長い。

駐大阪・神戸総領事館 総領事 パトリック・リネハン氏

みなさん、こんにちは

ただいまご紹介いただきました駐大阪・神戸米国総領事館のリネハンと申します。今日はみなさまとご一緒できまして非常にうれしく思っています。また、日高先生ともご一緒できて、非常に光栄であります。

本日は、私がゲイであることについて、それからアメリカのゲイの状況についてお話をすることができ、非常に光栄に思っています。

今日の話の中で、ゲイであることはどういうことなのか、ゲイについて感じることなどをお話しし、アメリカや日本そして世界でゲイの人々の人権に対して尊敬を示すきっかけになればと思います。

目に見える存在であれ

時々、なぜ、そんな話をするの、なぜ、そんな話をする必要があるの、といった質問を受けることがあります。その問いに対しては、ウガンダの

ゲイの人権活動家であるデイビット・カト氏の言葉をもって答えることにしています。

「もし、わたしたちが隠れているのならば、人々はわたしたちが存在していないと認識してしまう。」

彼はその言葉通り隠れてはいませんでした。人々の前に立って、目に見える所に出て行き、目に見える存在になったのです。彼はゲイの人権のために活動を続け、2011年にそのために命を落としました。

世界では、地域によってはゲイであることが命に関わるほど危険であることもあります。しかし、日本ではそういったことはありません。アメリカでも通常ならば、ゲイであることで殺害されるということはありません。

しかしながら、日米両国において、ゲイは、人々には長い間、目に見えない存在であり続け、そしてまた、ゲイであることについて、差別を受け、害を加えられることもありました。それは、時には故意に加えられる事もあれば、無意識の内に害



を加えられる事もありました。今日はそのことについてお話ししたいわけです。

「目に見える存在であれ。」

人の目につき行動を起こすべきである。そしてその人権をもり立てるべきです。

ホン・ソクチョン氏との出会い

これ以上お話を進める前に、みなさまに、わたしの大切な人を紹介したいと思います。それは、わたしのハズバンド（エマーソン・カネグスケ氏）。パートナーといわず「ハズバンド」と申しました。非常に恥ずかしがり屋ですので、後ろの方に座っていますが、今立ってごあいさつさせていただきます。スピーチが終わりましたら、わたしと一緒にこの壇上でみなさまからの質問にお答えすることになります。

なぜ、わたしがこの時点でエマーソンを紹介したかといいますと、わたしの前任地であるソウルでの出来事が関係しています。日本に赴任する前は、ソウルのアメリカ大使館に勤めていました。そこで、ホン・ソクチョン氏という人物と出会いました。ホン・ソクチョン氏は、韓国の俳優で、公人としては、初めて自分がゲイであることを公表した人物です。

10年ほど前ですが、このホン・ソクチョン氏は、韓国でも非常に有名なコメディアンでした。あるインタビューで、「あなたは、ゲイですか？」と聞かれたので、「ええ、そうですよ」と答えました。その翌日にはすべての契約が、キャンセルされてしまったといいます。それから10年間、ホン・ソクチョン氏は闘い抜きました。闘って、いまはビジネスマンとなって10軒にのぼるレストランの経営をし、だんだんテレビにも出演するようになりました。現在、最も人気のある人物の一人です。

ある時、エマーソンがホン・ソクチョン氏に「わ

たしたちはアメリカを代表する外交官であり、韓国のゲイの人たちの人権のために、一体何が出来るのか。」とたずねたところ、ホン・クチョン氏は「あなた自身であれ、人の目に触れるようになれ。」と答えたのです。

現在でも、韓国で公的な立場である人でゲイであるということを公にしている人は非常に限られています。ホン・ソクチョン氏はその限られた一人です。

どちらも「夫」です

昨年夏、わたしたちは駐大阪・神戸米国総領事館に勤務することになり、日本に赴任しました。そのときに日本の状況は、ほぼ韓国と同じであると感じたわけです。公の場でエマーソンを紹介するとき、例えば、関係者あるいはビジネスマンに「こちらがハズバンドです。」とエマーソンを紹介します。そうすると「え、何ですか？」と聞き返されます。

50代、60代の方が質問される場合は、このように質問される場合があります。「じゃあ、どちらが奥様ですか？」と。「いや、妻はいないのです。同性の結婚となります、どちらも夫なのですよ。」とお答えします。

「奥様は、いないのですか？」と聞かれます。「どちらも夫、『夫』です。」と答えます。この1年間、ホン・ソクチョン氏にいわれたアドバイス～隠れてないで、人の目に付くところに出て行け。そして何か行動しなさい～を実践してきました。

つまりゲイについてただ話すだけではなくて、身をもって示してきたのです。そのことにより日本のゲイのみなさんに対し、何か助けになるのではないかと思って過ごしてきました。例えば、神戸まつりのパレードに参加し、オープンカーに乗ってエマーソンと一緒に手を振ったりしました。それから東京や大阪、名古屋などで開かれたゲイ

のパレードにもエマーソンと一緒に参加しました。それだけでなく神戸新聞や産経新聞など、関西ではそういった新聞にもインタビューを受け、全国版では朝日新聞のコラムにゲイのカップルとしてとりあげていただきました。また、ビジネス誌のダイヤモンドでも10ページにもわたる特集を組んでくれ、ゲイの人権がビジネスにとっても重要だというメッセージを伝えてくれたのです。

夫が日米親善女性協会の会長に

民間の団体で、ジャック（US Japan friendship women）というのがあります。日米親善女性協会とでもいいますか、そういった団体があります。35年前にアメリカ総領事の関係者の妻たちによって作られ、代々総領事の妻が代表を務めてきました。日本の若者が海外で勉強する機会を設けるために、何百万円もの寄付を行う、といった活動をしています。

わたしたちが大阪に赴任してきたときに、親しい友人たちが「総領事には、奥さんがいないじゃないか。」と心配してくれました。エマーソン自身も「わたしは女性でもないし、アメリカ人でもない。総領事の妻でもない。それから関西出身でもない。」ということで非常に心配していました。

しかしながら、ジャック（日米親善女性協会）の女性には驚かされました。「どうぞ、エマーソンさん、会長になってください。」とってくれたのです。「この協会は、常に総領事の配偶者が務めてきた。今後もそれを続けていきたいし、この協会も新しい時代の波に応じて変わっていかねばならないのです。」と。

その結果、エマーソンが会長を務めています。わたしは非常に幸せ者といえます。ジャック（日米親善女性協会）のメンバーは50～70代くらいの方たちですね。（古い世代にもかかわらず、エ

マーソン氏を受け入れた）このことから、わたしたちは日本ですら変化が起きていると感じました。

日本の変化を実感

日本に赴任する際、大使館の上司がエマーソンのビザ取得について外務省と1年間交渉を続け、その結果エマーソンがわたしの家族と認められ、ビザを発行していただきました。日本も変わっているのです。

最初、日本でお会いする方たちは、（エマーソン氏をハズバンドと紹介したら）「え、何ですって？」とおっしゃいますが、2回目に会うときは、「ああ、エマーソンさんはハズバンドですね。」とおっしゃいます。そして、神戸でも大阪でも広島でも京都でも、非常に歓迎していただきます。兵庫県知事、神戸市長にも歓迎していただきました。これらを通じ日本が変わっていると感じます。

政府にホモのいる場所はない

一方、アメリカもまた変わっているということをお話したいと思います。わたしはアメリカの外交官として働いて29年になります。1984年6月に外交官になったわけですが、そのときの上司の言葉をそのまま言いますと、

「アメリカ政府には、ホモのいる場所はない。」
「ホモであるのなら、今すぐ辞めて欲しい。」

国務省に入るためにずいぶん頑張ってきました。筆記試験も合格したし、面接も受けました。それから言葉も一生懸命勉強しました。国務省に入ったことは、自分の手で勝ち得たものだ、と感じました。だれかがホモが嫌いだからという理由でこの仕事を辞めたりするものかと反発し、辞めずに働き続ける決意を固めました。同時に、この

ことについて口を閉ざそうとも思いました。人の目に見えないようにしようとも思いました。

これが 1980 年代当時の事情でした。1950～60 年代にも当時の状況があります、日本にも、そしてアメリカにもその時代の状況というものがあるのです。現実には、ゲイの人たちは目に見えない、存在もしない、人権もないという考え方がまかり通っていたのです。もし、その当時、わたしがゲイであることを政府がわかっていたのなら、職を失っていたかもしれません。

ゲイの人権を守る3か条

1955 年のことですが、アメリカ政府は、ラベンダーズケアといわれる、5,000 人にのぼる人たちの解雇を行いました。しかしながら、時とともに、アメリカの考え方、ゲイに対する考え方が変わってきました。ゲイの人々にも人権があるという考え方が、今では確立され、それが今後、より進展していくと思います。

わたしが生まれたのは 1953 年です。国務省に入省したのが 1984 年で、その間にゲイの人々は、公の場にはまったくくないということになっていました。ゲイの俳優もいなければ、政治家もいない。それから軍隊にもそんな人はいない。公の場には、ゲイは一切いないということになっていたのです。

当時、私は、ゲイの若者でしたが、お手本にするような人も目標にするような人もいませんでした。この世界というものはどういうものなのかということを知ってくれる人はだれもいなかったのです。

これを変えたのは、ゲイの人たち自身の力でした。ゲイの人たちは、自分たちの人権を守ろうと決めたのです。彼らは、3つのことを決めました。

1つはビジフル。公の場に出てくること。人の目につくこと。

2つ目には、アクティブであること。行動を起こすこと。

3つ目には、自分たちの権利を、人権を政治の場面に訴えていったのです。



行動を起こさねば

1968 年にニューヨークで、ストーンウォールといわれる暴動が起きました。事の始まりは、ゲイの人たちがバーに集まり、ビールを飲みながらおしゃべりをしていたのです。彼らがしていたのは、ただそれだけだったのです。しかし、警察官が集まってこれらの人たちをゲイであるという理由で逮捕したのです。こういったことが長い間にわたって続きました。ゲイであるということで逮捕され、不幸につながったのです。

もし、彼らが、ここで行動を起こさなければ、こういった状態が長く続く危険性もあったのですが、1968 年の 6 月、彼らはストーンウォールに集まり、行動を起こしました。自分たちの平等な権利のために闘ったのです。

1 年後、ニューヨークのゲイの人たちは、この出来事を記念することをうたって、初めてゲイのプライドパレードを行ったのです。そして 2 年後、アメリカの 10 都市で、ゲイのプライドパレード

が行われました。ゲイの人たちに対する意識を高めるために行われたのです。

1977年には、サンフランシスコで初めてゲイの人が市議会議員に当選しました。彼の名前はハーヴェイ・ミルク氏といます。

みなさんはこの人物の名前をご存じかもしれません。そして、ハーヴェイ・ミルク氏は、1年後に暗殺されてしまいました。理由はゲイであるためでした。

その4年後の1982年、初めてゲイであることを公言してアメリカの議会に当選した人物がいました。マサチューセッツ州のバーニー・フランク氏といます。バーニー・フランク氏は、30年間下院議員を務めた、非常に尊敬されている人物です。今年引退し、マサチューセッツで同性婚をする予定だそうです。

ハーヴェイ・ミルク氏やバーニー・フランク氏は、まず、ビジフルであること～人の目につくこと、そして、アクティブであること～活動を起こすこと。その重要性を問いかけます。その後、アメリカにおける憲法や条例は、人権つまり平等といった人権に対する活動と、緊密に関係しており、その例から学ぶことが多いのが現状となっています。

人生で一番幸せな日

現在焦点が当たっているのが、結婚の平等性ですが、過去2、3年大きな進展がありました。

ゲイの人たちが結婚できるようになった最初の州がマサチューセッツでした。現在、それに加えて9つの州、それから、ワシントンDCで、ゲイの人たちは、平等の権利を持っています。お気付きだと思いますが、アメリカではまだ40の州がゲイの結婚を認めていないということになります。

ゲイの確かな人間として申しますが、私にとっ

て人生で一番幸せな日、そして誇りを感じた日というのは、エマーソンと結婚した日でした。わたしは会う人たちにこの指輪をお見せします。本当に幸せな結婚をしているのだと、そして、わたしもハズバントと結婚しているのだと、平等な権利を得る立場であると。そして、市民として周りの人と同じような権利を持っているのだと。エマーソンも見せてくれていますが、指輪をはめていません。

正しい権利とはなにか

わたし自身も時とともに変わってまいりましたし、社会も変わりました。アメリカ政府も変わってきたのです。「政府にはホモの居場所はない。」といった人物が30年前のアメリカ政府にいましたが、現在は総領事館のホームページ上でハズバンドがいることを公開できています。

また、神戸市にお招きいただいて、ゲイの権利について、市民のみなさまにお話しすることができるとは、とてもとても想像できませんでしたが今、こうしてお招きいただいております。

オバマ大統領とクリントン国務長官はすべての外交官に対し、ゲイの人権、ゲイの権利が世界中に存在しているというメッセージを伝えるよう指示しました。数か月前、ニュースでご覧になったかもしれませんが、オバマ大統領は個人的にゲイの人々の結婚の権利を認めるということを明らかにしました。さらにクリントン国務長官は、さらに積極的に、世界中のさまざまなフォーラムなどで活発にゲイの権利をサポートするということを公にしています。

1年前のこの週ですが、国務長官は、ジュネーブの国連の人権理事会において、ゲイの権利についてスピーチをおこないました（全訳参考資料0ページから）。

彼女は最初にこのような言葉でスピーチを始

めました。

「わたしたちは完璧でないということを理解しています。」

アメリカは完璧ではありません。アメリカでは、長い間ゲイの人たちに差別を行ってきました。しかしながら、長い間、時とともに人権、正しい権利というものは何かということを理解してきました。

1946年、アメリカの軍隊では差別がありました。黒人の兵士は白人の兵士と一緒にすることはなかったのです。しかしながら、ハリー・トルーマン大統領は、これは変えねばならない。アメリカの軍隊は1つにならねばならないといったのです。

この人種差別に対する考え方は変わってきました。それと同じようにゲイの権利についても進めていかなければなりません。1960年、いくつかの州では、人種が違う人同士の結婚は認められていませんでした。例えばアメリカの兵士が日本の女性と恋をして結婚し、自分の州や故郷に帰って日本人を奥さんとするのが認められませんでした。

考え方というものは進化しているのです。同様にこの社会のゲイに対する見方というのも進化しているのです。

クリントン国務長官は外交官に対して、ゲイの平等な権利について世界中に広めなさい、なぜならそれは正しいことだからであると申しました。

権利を守ることは賢いこと

今週、クリントン国務長官は、また新しい非常に重要なスピーチを行いました。これは、「クリア」という団体ですが、法務省の中のゲイやレズビアンの人たちで作られている団体で、20年前に発足し、わたしもこの団体の当初からのメンバーであることが本当に幸せです。

クリントン国務長官は、レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスの人々、つまり性的にマイノリティ少数派の人々ですが、それらの権利を守ることは正しいことである。そして、それだけではなくスマートである、賢いことでもあるとおっしゃいました。

外交官としてやらなければならないこと

わたしは外交官として、世界と関係を構築していかなければなりません。この世界というものは、非常に多様性に満ちています。そう、これがアメリカの政治的な見解であり、公式に権利を認めています。が、まだまだやらなければならないことがたくさんあります。

つまり、まだ一部の権利だけが認められているという状況です。ゲイの人々の権利は認められてきて非常に大きな進展がありましたが、まだ克服しなければならないことがないわけではありません。

ですからわたしは、ロバート・フロストの詩を最後に引用したいと思います。

わたしたちが眠りにつくまで、まだまだ道のりは長い。

たくさんのことを成し遂げてきましたが、まだまだこれからの道のりは長いというわけです。

ゲイの悩みがあるのなら、だれかに助けを求めてください。

エマーソン・カネグスケ 氏

日系ブラジル人として

成長していく過程で、どうしても自分では解決できない問題があります。わたしは日系ブラジル人で、半分は日本人で周りから様々なからかいやジョークを受けた経験があります。

しかしながら、学校の先生は、「学校で成績がいい子供たちを見てごらん。」それから「学校で良く目立っている生徒たちを見てごらん。彼らは日本人じゃないか。」ということをお願いしました。家では、両親が祖父母のことを話してくれました。

苦労しながらブラジルにやってきたことを話してくれたのです。このことを聞いて心が強くなりました。そしていじめられることを気にしなくなったのです。

ゲイよりホームレスである方がいい

しかしながら、半分日本人の血が混じっていることで、そのような気持ちを抱くことができた一方、自分がゲイであることは、そのときは気が付いていませんでした。周りの方が先にゲイであることに気が付く場合もあるわけです。

先生について相談するわけにはいきません。先生も冗談のように受け止めるかもしれないし、親にも相談することができませんでした。親には理解してもらえないのではないかと思ったからです。

わたしは非常に孤独で悲しい想いを抱いておりました。母は、ゲイであるよりもホームレスである方がいいというのです。そこで、母は心理学

の先生の所に私を連れて行き、息子がゲイになってしまったということを嘆き悲しむわけですね。



何も問題はありません

心理学の先生から「何が悩みなんだ」とたずねられたので、「わたしはゲイなんだ」と答えました。とてもいい先生でして、母にお願いしました。「あなたの息子をごらんください。OKです。何も問題ありません。」

「地上の荒波の中を自分の人生を生きていくのです。生きていただけなのです。問題はお母さんあなたのほうにあります。嘆き悲しむのはおかしいです。」とお願いしたのです。

それにインターネットを通じて友人ですとか、ブラジルの様々な支援団体も知るようになりました。それを通じて私もだんだん強くなり、ブラジルでは管制官として仕事をするようになりました。それからアメリカの大学で学ぶ機会もあり、パトリックとも出会い結婚しました。結婚式のときに真っ先に駆けつけてくれたのは母でした。この結婚を祝って歌を歌ってくれました。

手を差し伸べてあげてほしい

もし、みなさんが若くて悩みがあり、ゲイの悩みがあるなら、だれかに助けを求めてください。先生でもいいですし、友達でもいいですし、アメリカの大使館、総領事館のほうでも様々なリンクがあり、サポートを提供してくれる人たちがいます。

それでいまよりももっと状況がよくなるのだといえます。現在、大きな問題と感じられていることも後から振り返ってみれば、「ああ、おかしいな。小さな問題だったな」と感じることもできるようになるのです。

もし、みなさんが悩みを抱えている若者の恩師であったり、両親であったりするのでしたら、その発せられるサインに注意を払ってください。そして手を差しのべてあげてください。

わたしの場合では日本人であるという手助けがありました。ゲイであることに関しては、なかなか周りから手助けはなく、非常に難しい状況でした。そこでみなさんが気付いたのならば手を差し伸べていただきたい。

Q：日本人はゲイに対して寛容か？

総領事は、いつも「わたしはゲイの夫がおります。わたしたちは、日本の中でも理解が広がっている。日本人は、寛容なんだ。」と非常に前向きな意見をいっておられるが、実は、日本人って、そんなに寛容じゃないんじゃないですか？

A：恐れている気持ちが現実よりも大きな脅威感を抱いている。

リネハン総領事

わたしは外交官として日本に赴任しております。アメリカを代表して、ほかの国、ほかの社会で働くという役割です。いま日本の習慣というものを理解したいと思いますが、個人に対する期待、期待しているものが違うというのだろうな、ということがあります。

日本にまだ若いころに外交官として赴任した時に、よく結婚しているのかということを知りました。「いえ、まだなんです。」と答えました。同僚で結婚している人がいる場合、次によく聞かれる質問は「子どもはいるのか。」「子どもはいません。」と答えると、「なぜ子どもさんがいないの。」と驚かれます。「娘がいます。」と答えると、それは残念という対応をされ、男の子が欲しいでしょといわれるわけです。こういったことが期待されるのですね、この社会においては。わたしは独身ですといいますが、じゃあお見合いをどうですかということで、たくさんのお見合いをセットアップしていただきました。

例えば、お隣さんにごはんを誘われていきます

と、若い女性を紹介されるわけです。わたしの写真をごらんになるとハンサムですねといわれるわけです。というわけでその方が写真を出すまでお見合いだということに気がまずいで、写真のことを伺いまして初めて、「はあ！これがお見合いなんですか！」という風に気付くわけです。

外交官としましては、その社会、その国で何を期待されるかという配慮はします。それからお招き下さった方にも悪意はないということもそういうことも理解しております。

ですので、その感情を傷つけるようなことはいたくない。また、同時にわたしを嫌いなわけではありませんし、正直でありたいと思いますし、嘘はつきたくないというわけです。

質問に関してちょっとわたしの方からアドバイスさせていただくとすれば、時々恐れている気持ち。その気持ちのほう現実よりも大きな脅威感を抱いてしまうことがあるのではないかと思います。

わたしにはゲイの友達はいますし、ハズバンドと幸せに問題なく暮らしているわけですね。何かあるのではないかという恐怖感の方が現実よりも大きく育ってしまうことがあるのではないかと思います。

Q：お二人の出会いはいは？

リネハンさんとカネグスケさんはどういうところで知られてご結婚されたのですか？

A：ワールドカップ開催中の東京で、ブラジルが優勝した日に。

カネグスケ氏

なぜ結婚に踏み切ったのかどこで出会ったのかということですが、まず、わたしはゲイですので結婚できるということも、結婚したいということもあまり考えたこともなかったわけですね。しかし、現実問題として一緒に暮らし始めた、それだけで十分だったのですが、結婚に踏み入ったということは、わたしがブラジル人で、彼がアメリカ人で様々な問題がありまして、ゲイの問題もありますし、さまざまな政府の問題もありました、それから文書上の問題もありました。そういうことをオープンにするために結婚に踏み切りました。

リネハン総領事

わたしとカネグスケが、最初に出会ったのは東京だったのですね。当時ワールドカップの最中で、ブラジルが勝った日でした。ブラジルが優勝した大会なのですけれど、その日同じ場所において、ブラジルの大会を見に行くときに、そこにエマーソンがいました。

彼を見たときにハッとピンときたと。ですから、なぜと聞かれても困ります。見たときにこの人だと感じたのです。人生というものには、様々な制

約があります。何ができるのか、何ができないのか、でエマーソンと出会った。この人だとピンと来たのですけれど、そのときはこの人と結婚できるとは思わなかったのです。

なぜなら、アメリカのどこの州でもゲイの結婚は認められてはいませんでしたし、ブラジルでもそれは認められていなかったのです。

そして 2004 年、わたしの育ったマサチューセッツ州が、アメリカで最初のゲイの結婚を認めた州になり、嬉しく思いました。

当時、わたしたちはブラジルにいました。そうこうしているうち他の州法でも、バーモント州、ニューヨーク州とか、アイオワ州とかも結婚を認めるようになってきました。

ブラジルの次に、わたしたちはカナダのオタワに赴任しました。カナダでは、同性婚が認められています。で、最終的に結婚に踏み切ったわけです。

Q：日本のゲイパレードの規模が小さいのはなぜ？

さきほど日本のゲイパレードの紹介をされましたが、セクシュアルマイノリティのパレードという形で、大阪だとか東京だとか、この間は名古屋で始めたというお話があったのですけれど、その規模があまりにも外国のものに比べて小さいというのを参加されてどういう風にお思いですか？

※海外のゲイパレードは、数百万人の規模。アジアでも数万人規模になるが、日本では1~2千人くらいの規模。

A：日本人の特性かもしれないが、変化は徐々に必ず起きる。

リネハン総領事

エマーソンの故郷のブラジルのサンパウロでは、世界でも最大規模のゲイパレードが行われています。それから、私たちが住居を構えているワシントンDCでも、非常に大きなパレードが行われています。

変化というものには時間がかかるわけで、人々の考え方そういったものの心理が変わっていくには時間がかかるものです。すぐに変化が訪れるわけではありません。今、何ができるのか、可能なのかというと、できることはやっているわけですが、自然と違和感を感じない、そういったことをやりたいわけです。

したがって、人によっては自然にできる、できないがあるのです。日本の人たちはちょっと控えめであったり、恥ずかしいという気持ちが先にたったりとそういったことがあるのかもしれない。

でも変化というのは徐々に必ず起きます。そうなるにだんだんと自分のことを表現していくことができると思います。それから様々なパレードがあるということでしたが、そのパレードをするときは、人々は何かの権利を主張してパレードすることが多く、日本でもさまざまな状況があると思います。

3週間前ですが、日本IBMの方と話をする機会があったのですが、そこでは性的少数派の社員に対しても、ゲイではない社員と同じような権利を与えているんだよという話をうかがいました。結婚祝いとして10万円を贈る制度があるそうです。けれども今のところゲイの人たちからの申請はないということもうかがいました。

日本の社会では性的少数者のなかでは、まだまだ自分たちの事をいわないという傾向があるのかなと表だって口にしないという傾向があるのだなと思いました。